

## 兄さんの慰問袋

あの当時は、国民の三大義務は、納税、教育、それに兵役だった。満二〇才になると、徴兵検査があり身体に欠陥がなければ、兵役の義務がある。甲種合格、第一乙種合格・第二乙種合格があり。丙種は不合格で、兵役免除であった。

兄は甲種合格、私は第一乙種合格であった。最初の兵役は徴兵検査があったから三・四ヶ月後に入営する。兄の入営は、まだ大東和戦争が始まる前で、満州国に渡った。満州国は日本が作った中国の北東部、北朝鮮に隣接する一郭である。兄は騎兵であった。騎兵は馬に跨り訓練や戦争をする、騎兵隊は終戦まで日本にあった。いま考えると武家政治時代を彷彿させる。

慰問袋は、戦地の兵隊さんに送る品々を詰め込んだ袋である。婦人会等で一人一袋、手拭いを二つ折りして作り、中には日用品、缶詰、お菓子、本、心のこもった手紙等が入っている。全国から何千・何万個も集められ、満州、中国、台湾等、外地の兵士に届けられる。大東和戦争になつてからは、行われなくなった。満州の”チャムス”に入営していた兄さんにも配られた。誰が送った慰問袋が配られるか分からない。兄さんには新潟の若い女性からの物だった。ここから兄さんのロマンスが始まった。兄さんは御礼の手紙を書く、それに返信が届く、手紙のやりとりで長く文通していれば、双方とも恋に発展するのは自然である。異国、酷寒零下の満州で慰め励まされるのは、彼女の手紙だったろう。約三年で下士官になり除隊になった。

自由の身になり内地の土を踏んだ兄さんは真つ直ぐ生家に帰らず、新潟に足をのばし会った。写真も交換していたのだから、純粹な気持ちで会えたと思われる。そして生家に辿り着いた。

真つ先に両親に新潟の女性との交際の経緯を話し、結婚の許しを乞うた。父は直ぐ返事をせず女性の住所を聞き出し、どういう女性かと調査が始まった。父は役場の助役でその手の調査はお手のものである。私は詳しく教えて貰えなかったが、水商売の母親を持つ身であったようだ。父はガンとして許さず兄の悲恋に終わった。

現代だったら、長男の身も、親も捨て、別な人生を歩んで恋を全うしたたらう、今は亡き兄を偲ぶとき、私は感慨に耽り、人一倍涙もろい私は、流れを止める事が出来ない。